15 張飛図

円山応挙

江戸時代（十八世紀）
紙本着色
本紙一三三・八×五八・五
一幅

円山応挙は中国の故事にまつわる人物も多く描いており、唐の名将・郭子儀や、『三国志』の勇者・関羽などの図が知られる。本図は、その関羽と共に劉備に仕え、武勇伝で知られる張飛を描く。図様より、建安十三年（二〇八）、曹操の南下を恐れて劉備が逃げ出す際、殿軍を任された張飛が当陽県の長坂において敵軍を迎え、二十騎の部下と共に川にかかる橋を切り落として目を怒らせ、矛を脇にはさみ携えて敵軍を一喝するという、有名な場面を描いていよう。署名と「応挙」朱文方印より、天明後半期から寛政頃の、応挙の五十歳代後半以降の作例と考えられる。人気のあった張飛は、大きく見開いた眼、エラが張った頤、逆立つ髪、がっしりとした体躯など、鍾馗や明王像の容貌に影響された特徴的な風貌でイメージ化されているが、応挙は繊細な伸びやかな線を用いながらも迫力を失うこと無く、存在感のある張飛を描いている。そして、その張飛が騎乗する馬もまた、正面をしっかりと見据えて優雅に、勇ましく立つ。

本図は、光格天皇（一七七一～一八四〇、在位一七七九～一八一七）よりの伝来品と伝えられている。応挙は、寛政二年（一七九〇）の寛政度内裏造営では弟子と共に障壁画制作に当たり、また御所の調度として制作された「群獣図屏風」「源氏四季図屏風」が伝来し、他にも多く作品の用命を受けていたことが知られるように、皇室とは縁の深い画師である。さらに、応挙は光格天皇の兄である妙法院真仁法親王とも関係が深く、多くの御用を賜っている。本図は、こうした皇室、皇室の縁者との関係の中で制作され、光格天皇のお手元から代々伝えられた作例と考えられよう。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

駒競べ（こまくらべ）——馬の晴れ姿
三の丸尚蔵館展覧会図録No. 73

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十八年七月九日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan